

《インタビュー》

東日本大震災から3年、 今を考える

吉岡 忍



廃墟となった原発事故被災地の町 (福島県浪江町)

3・11後、毎月、すでに延べ200日以上にわたり、現地取材を重ねられてきた吉岡忍さん。震災体験の風化を危惧する声もあるなか、現地で何を見、何を思われたか、3年目の3月6日にお話を伺いました。(編集部・阿部 有馬)

震災体験の風化? うーん、どうだろう。

誰かが意図を持って忘れさせようとしているとは、私は思わない。そんなことができるほど、政府与党も東電も知恵はないもの。そのくらいの悪知恵を持ってほしい、そうすれば世の中はもっとうまくいくんじゃないかな(笑)。

ただ、千年に1度とか、戦後最大と言われるほどの大災害だったから、誰もがその衝撃を受け止めるだけで精一杯、ということはあると思う。そこから何を汲み取るか、私自身、いまもよくわからない。だから、毎月のように被災地に行く。岩手県から福島県まで歩いてみると、日本の歴史や現在を考えるヒントがたくさんある、と私は思っています。

自然と漁業

震災直後、私はあちこちの浜を歩いた。ど

こへ行っても、目に突き刺さってくるような惨状ばかりで、考えることもできなかった。しかし、ここから奥へは行けないな、と思ったのは、私が漁業のことを何も知らなかったからですね。

平均的な日本人は1年間に60キログラム近い魚を食べています。それなのに、産業としての漁業は震災前から衰退していた。都会や町の消費者が不景気のせいもあって安く、簡単に食べやすい魚ばかりを求めたせいです。町から魚屋が消え、スーパーでは輸入品を切り身にして売っている。いまやわれわれが食べている魚の4割は輸入品です。もう煮魚なんてたいていの家庭でやらないから、魚食文化もなくなってきた。これでは漁業への関心もなくなります。

実際に浜を歩いてみると、私の知らないことだらけでした。3・11の翌日は養殖銀ザケ

の初水揚げが予定されていた。その養殖棚が大津波でめちゃくちゃに壊され、そこらじゅうに打ち上げられている。牡蠣養殖の棚も壊されて、海を覗くと、牡蠣が散らばり、銀ザケが群れをなして泳いでいる。

はじめ私は、何だ、養殖か、と思っていたんだけど、2ヵ月もすると、避難所にいた浜の人たちがそわそわし始めるんだね。5月6月は牡蠣の産卵期で、ホタテの殻を束ねて海に垂らし、ケシ粒のようなその幼生を捕獲する時期だったんです。でも、30代、40代の漁師たちは動かない。家も漁船も漁具もない、他方で家族も養わなければならない、何か別の仕事があるんじゃないか、と悩んでいる。まだ転職ができる年代だからね。

そのとき動

き出したのが女たちだった。朝早く浜に行ってみたら、10人ほどの女たちがしががみ込んで、こつこつとホタテの殻に針金を通して束ねるための穴を開けていた。早くしないと時機を逸して、



被災後、動き始めた浜の女たち (宮城県牡鹿半島/2011年6月)



東北と中央と歴史

来年まで待たなければならなくなる。浜の復興はそれだけ遅れる、ということが彼女たちにはわかっていった。それを、遠くから漁師たちが見て、びっくりしているんだ。これって、津波前は男の仕事ですよ。浜が浜らしく動き出したのは、このときからだった。

一方で私はね、たとえ養殖でも、漁業は自然のリズムに人間が合わせた季節季節の仕事なんだ、ということを実感したんですね。あらためて発見した、と言ってもいい。仕事というか、人間が生きていることと自然とが連動していると感じることは、都会で暮らしているとはとんだないでしょ。むしろその不自然さが気になり始めたんです。

福島第一原発の周辺に足を踏み入れたのは、3・11から2週間後です。20キロラインまで行かないうちに線量計が上がって、振り切れてしまった。80マイクローシールベルトの場所にも、まだ10数人の人たちが暮らしてい

た。放射線の専門家もいっしょだったので、避難するように勧めながら、私もひやひやしていました。

太平洋が近いけれども山々が迫ったあのあたりを眺めていると、どうしても中央と東北の関係を考えざるを得なくなる。何でこんなところに原発があるんだ、ということ。

中央の権力が東北を視野に入れ始めたのは、それこそ武内宿禰やヤマトタケルが東征した神話的王権の時代からですが、収奪・植民地化の最初のきっかけは八世紀なかば、岩手県で見つかった金が東大寺の大仏の鍍金に使われてからですね。この時期、坂上田村麻呂がエミシの頭領アテルイを捕縛し、東北をヤマト朝廷に組み入れた。

その後、平泉の藤原三代の栄華があり、それが源頼朝によって討伐されても、その後に義経伝説が広がるなど、それなりに東北には中央権力に服従しない気風が残りますが、何といっても決定的だったのは戊辰戦争でしょう。北上山地や阿武隈山地を越えて浜に降りると、いままその言い伝えがさまざまに残っている。

これが面白いんだ。敗れた奥羽越列藩同盟の面々は榎本武揚らに合流して、函館で戦争を構えるつもりだから、浜にきて漁船を奪い、北海道に向かった。その残兵を追いかけてきた薩長軍も勝利に酔って、漁師らに酒を持っ

北といっても、陸と海では歴史の記憶や伝え方がまったく違う。

とはいえ、いま全国で原発が立地するのは、鹿児島県の川内原発を別にすれば、どこもこの戊辰戦争で朝敵とされ、敗北したり冷遇されたりしたところばかりですよ。つまりは、その後の日本近代化の過程で軽視され、過疎化や貧困に追い込まれ、地域存続のためには原発を受け入れるしかなかったという土地柄です。ここには歴史を貫く壮大な差別の構造がある。これを見落とすことはできないな、と私は思っている。

もともと、東北のその後の思想的展開はめざましかった。薩長藩閥という地域的イデオロギーを凌駕するには、より高い次元の普遍性をめざすしかなかったせいですね。

それが自由民権運動では、会津白虎隊の生き残りの千葉卓三郎の五日市憲法草案になる。国際主義では、『武士道』の著者で、戦前の国際連盟の事務次長になった新渡戸稲造や、渡米した日本史学者で、ポーツマス条約のとき偏狭な日本側をたしなめた朝河貫一の生き方につながっていく。宮澤賢治のコスモポリタンな寓話の背景にも、私は当時の東北が置かれた差別的状況への反発があったと思う。もちろんもうひとつ、石原莞爾や大川周明らの超国家主義も忘れるわけにはいかない。どれもこれも戊辰戦争後の東北の運命を背負い、東北から日本を飛び出し、良くも悪くもより普遍的な世界へ向かおうとした試みだっ

た、と私は思っています。

被災地を歩いていると、そういう歴史がまざまざとよみがえってきて、いまという時代を考える手がかりをたくさん与えてくれます。

原発とフジツボ

東電は、福島第一原発は地震ではなく、想定外の大津波で壊れたんだ、と言っていますね。危険すぎて近づけないから、本当のことはまだわかりません。でも、私は地元の工事



原発事故被災地では時間が止まったままだ (福島県富岡町／2014年2月)

関係者からこんな話を聞いたことがあるんですよ。

原発完成から何年も経って、彼の会社が原子炉やタービンを冷却して熱くなった排水を海に流す排水管工事を依頼された。案内されて、びっくりした。人の背丈ほどの直径の排水管にフジツボがびっしり繁殖している。東電は猛毒を流して殺したけれど、排水管をふさいでしまうほどくっついて、いくら削っても剥がれ落ちない、という。これでは冷却に使った海水を流せないから、あらたに地下を掘って、新しい排水管を設置してほしい、という注文だった。

そうやってあちこち掘り返し、あらたに据え付けた排水管が、すべての原子炉の下に埋まっている。最初の排水管はそのままだから、言い換えれば、それだけ原発の下は穴だらけで、土台がもろくなっていた、ということだ。す。「オレも専門だからわかるけど、あれじゃ、あれだけでかい地震に耐えられたはずはねえな」と、彼は言いました。

フジツボは漁船の底などにもついて、厄介な生き物です。アジアの海にとりわけ多く、日本の海のどこにもいて、とくに温排水のなかで繁殖する。

原発の危うさは、すでにさまざまに指摘されています。行き場のない使用済み燃料の問題も深刻です。私も原発は即刻廃棄するべきだ、と思っていますが、それにしてもこの話、浜を歩いてきた私には生々しい。膨大なお金

と高度な技術を駆使して危険を封じ込めているはずの原発が、自然に、どこの海でも生きているフジツボにあっさりやられてしまうとは……。

私たちは漁業ばかりではなく、自然や海や生き物の営みがあるという簡明な事実まで忘れていたのではない

か。人間はそのリズムに乗り、それに添ってしか生きられないのに、まるでそんなものはないかのようにふるまい、働き、暮らしている。私自身はまったく自然派の生活はしていませんが、それでもくり返し被災後の浜を歩いていけば、自然と人の関係に自覚的になるし、人間の小ささにも気づきます。

日本近代の150年間、われわれは大きく、強くなるのがよいことだと考え、そのために汗水流してきたでしょ。原発を必要としたのも、その一環だね。東京や西日本はまだその呪縛にとらわれているかもしれない。でもね、何もなくなつて更地となった被災地を見ると、コンパクトで居心地のよい町づくりこそ、いま大切なのではないか、と思う。漁業、自然、歴史、そういうものをもう一度考え直しながら、知恵を結実できればいいな、と私は思っています。

(よしおか・しのぶ／ノンフィクション作家、写真も筆者)

